

# 学校社会における高校生の対人関係と規範意識に関する考察

作田誠一郎

## 1. はじめに

学校を取り巻く現代社会は、大きな転換期を迎えている。グローバル化のなかで、これまで自明視されていた諸制度や共有価値が大きく揺らぎはじめている。また、対人関係においても希薄化が指摘され、新たな社会的連帯が注目されている。学校も例外なく生徒や保護者、地域社会との関係や枠組みが高度情報化やネオリベリズムの進展のなかで制度的な疲労を起しつつある。

このような状況下にある学校社会では、最も社会の変化に敏感な生徒の対人関係や対人意識が、教員や保護者にとってますます理解しがたいものとなるだろう。特に、従来の社会的に共有されてきた価値観や道德規範が激しい変化に晒されることで、指導する教員にとっては、何が社会規範であり、何が学校の対人関係におけるルールであるのかという根本的な問題を問い直す時代に入ったといえる。

本稿は、高校生の対人関係とその意識に着目し、個人化やリスク等の特徴が高校生の意識にどのように影響を与えているのかを明らかにする。さらに、この結果を踏まえて、高校生の規範意識について考察したい。

調査の概要は、2010年10月から同年11月にかけてX県の全日制の公立高等学校および私立高等学校の計41校（各校2年生奇数クラス）を対象に調査票を配布して記入してもらった集合調査法を用いた。全体のサンプル数は4,265である。また男女比は、女性2,053（48.1%）、男性2,212（51.9%）である。

## 2. 対人関係の大きな傾向

若者のコミュニケーション能力の低下が指摘されて久しい。特にコミュニケーションツールとしての携帯電話の普及とツイッターをはじめとするネット世界の新たな人間関係は、空間や世代を超えて若者の対人関係に大きな影響を与えている。一方で、若者を取り巻く今日の社会では、近代的な諸制度や思考の方法がその有効性を喪失しつつある。

1970年代にD.ベルは、工業社会から脱工業社会への転換、つまり、モノの生産から情報を中心とする社会の変化を指摘した。また、J.ボードリヤールもモノの実質的な価値から記号的な価値が消費の喚起となる社会の特徴を明らかにした。東西冷戦が終焉を迎えた90年代以降は、新たな経済的グローバル化やインターネットの普及と共にテロリズムや新たな格差、そして、グローバルな経済危機など、リスク管理や監視の許容が間接的であり、人間関係に影響を与え始めている。このような社会的な動向は、自己責任とい

う名の下で自由な選択を促す一方、さらなる個人化を促進していく。

U.ベックやZ.バウマンは、社会の構造変化に注目し、産業社会を「第1の近代」として伝統的な集団からの解放という意味の個人化を指摘し、ポスト産業社会を「第2の近代」（再帰的近代）として近代的な組織や国民国家からの解放を意味する個人化を概念化している。この「第2の近代」としての再帰的な近代では、個々人の選択肢の幅は広がり、個人の自律性は高められたが、他方では社会的なリスクに対峙する個人化が進んでいると指摘する。このような流動化する社会のなかで、高校生はどのような対人関係を築き、どのような規範意識を有しているのか。この高校生の意識を知ることが、今後の学校社会における教員と生徒の関係を探るうえでも重要な手がかりとなる。

これまでの高校生を対象とする先行研究を見ると、尾嶋(2001)がおこなった調査では、進路選択意識と学校生活や職業観などの社会意識を中心に分析し、16年間の変化を明らかにしている。また、友枝・鈴木(2003)がおこなった高校生の規範意識調査では、教師の意識調査を含めることで高校生と高校教師との規範意識や社会的国家観の差異等について考察されている。さらに、土場(2006)は、「現代青少年の規範意識の希薄化」という現象に対して高校生を対象とした調査と分析をおこなっている。その結果、「校則に対する遵守意識」と「校則に対する自律意識」という2つの独立した要因が高校生の規範意識に含まれていることを指摘している。

しかし、これまでに再帰的な近代の特徴を交えた高校生の社会規範の検討は、あまりおこなわれていないように思われる。本稿では、探索的な試みとして高校生の意識を通じて個人化やリスク等の特徴を明らかにし、この特徴を含めて高校生の規範意識について属性を中心に考察を進めていきたい。

はじめに、対人関係の全体的な傾向を見るために、数量化三類を用いた分類による得点平均の比較をおこなった。分類に用いた調査項目は、個人化傾向等を掴むための自らの性格を問う項目、対人意識を知るための友だち関係に関する項目を用いた。

使用した質問項目は、A1 一人の方が好き、「思う」のみ(1「そう思う」、2「どちらかといえばそう思う」を統合。以下同様)、A2 他人の目が気になる、A3 他人の同情はバカをみる、A4 他人に寛容であることは大切、A5 能力がない人に冷たい、A6 他人と同じくらいできる、A7 人の意見で決心を変える、A8 自らの行動を振り返り改善する、A9 親しい人以外に関心なし、A10 人から認められないと不安、B1 数少ない人と長く付き合う、B2 安心して話せる友だちがいない、B3 付き合い方を使い分ける、B4 人付き合いの損得あり、B5 人付き合いに損得あり、B6 一人でいると寂しい、B7 友人からの上から目線にむかつく、B8 「場の空気」が読めることは重要、B9 親友の悪い行為は注意する、B10 性格や意見の不一致は付き合わない、B11 約束を破っても気にならない、B12 浮くことに対して不安、である。各軸の固有値、寄与率、

表1 各軸の固有値、寄与率、相関係数

	固有値	寄与率	累積寄与率	相関係数
第1軸	0.1053	12.98%	12.98%	0.3245
第2軸	0.0739	9.10%	22.08%	0.2718
第3軸	0.0676	8.33%	30.40%	0.2599
第4軸	0.0573	7.06%	37.46%	0.2393

相関係数および各軸の特徴を表 1、図 1 から図 4 に示した。また、各属性のサンプル得点平均を図 5 に示した。

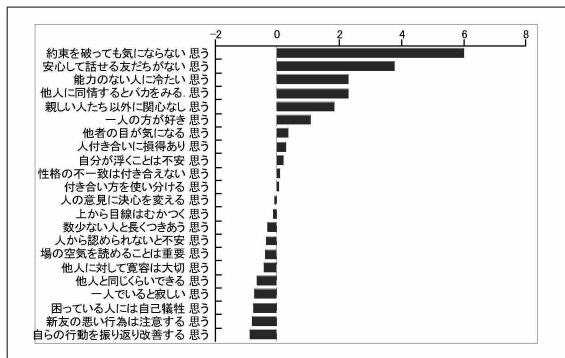


図 1 個人主義的傾向

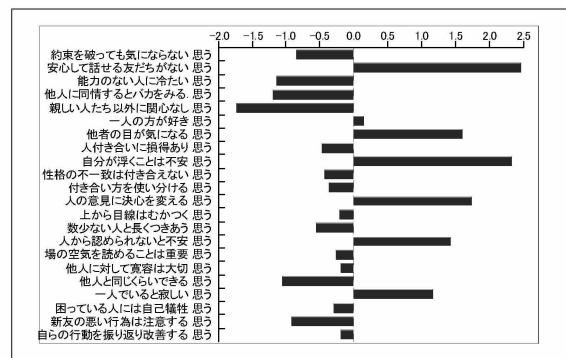


図 2 つながり重視傾向

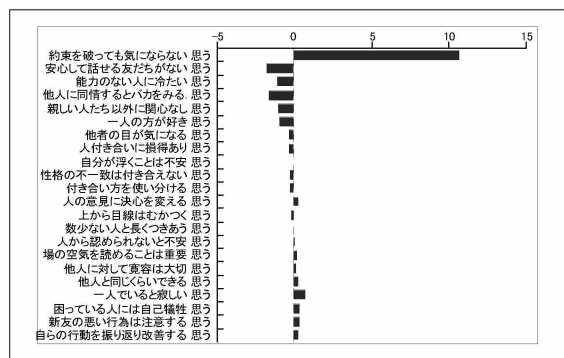


図 3 利己主義的傾向

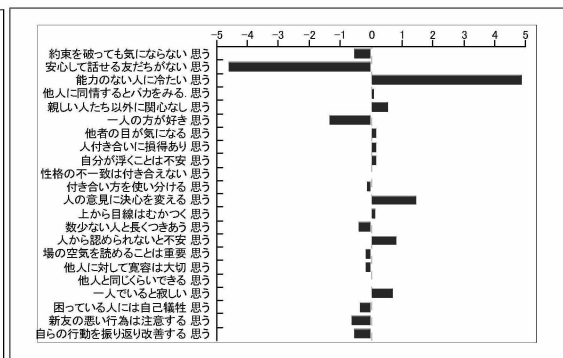


図 4 能力主義的傾向

図 5 から、性別および部活に関しては、4 つの軸にばらつきがあるが、「家族形態 (核家族・直系家族・拡大家族)」や「兄弟姉妹 (一人っ子・兄弟姉妹あり)」、「ひとり親家庭 (ひとり親家庭・両親あり)」の家族に関する属性では、4 つの軸で同様の傾向を示している。また、「ひとり親家庭」の項目がすべての軸のなかで高い傾向にあることがわかる。

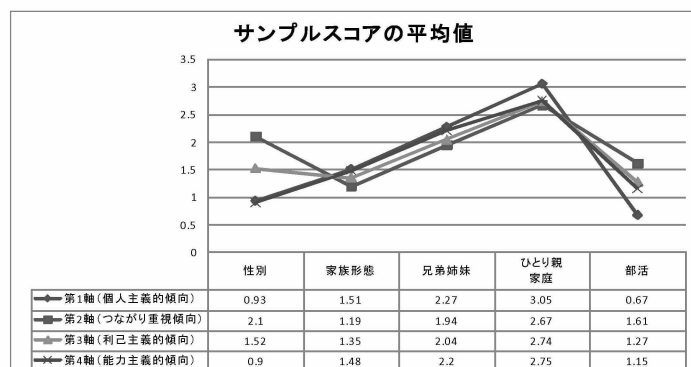


図 5 属性別のサンプルスコア平均値

さらに、ばらつきのあった性別および部活について、図 6、図 7 の結果を得た。図 6 では、「利己主義的傾向」は性別にかかわらず高い。しかし、「つながり重視傾向」は女子が高く、「個人主義的傾向」および「能力主義的傾向」は男子が高い結果となった。また、図 7 では、「利己主義的傾向」および「能力主義的傾向」は所属の有無における差は認められない。しかし、「個人主義的傾向」は所属している生徒に比べて所属していない生徒の平均値が高く、反対に「つながり重視傾向」は所属している生徒の平均値が高いことがわかる。

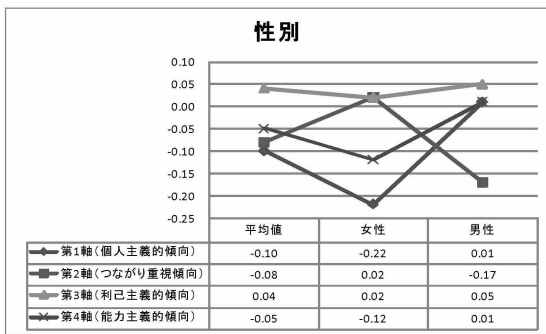


図6 性別のサンプルスコア平均値

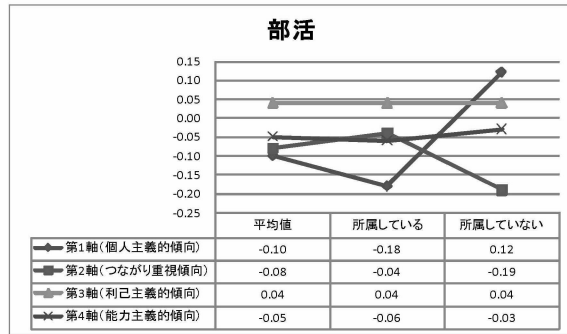


図7 部活所属のサンプルスコア平均値

この分析結果から、対人関係の大きな傾向として、個人化の特徴に関連するような軸が抽出された。社会制度や個人と社会の構造的関係が変化する再帰的近代社会のもとで、私化としての利己的で能力主義的な個人化の傾向が認められ、一方では、他者との紐帯が脆弱化することから生じる不安定な対人関係を回避するような「つながり」を求める高校生の対人関係の傾向が認められる。特に、「つながり重視傾向」の軸には、対人関係の不安感や他者からの自己承認も含まれていることから、個人化から生じる孤独というリスクに対する不安感が高校生の対人意識から読み取れる。

### 3. 規範意識の現状

Z.バウマンは、É.デュルケムが「積極的に道徳化する社会」を考究した道徳論に対して、道徳性の再個人化を主張した。つまり、モダニティと異なりリキッドモダニティ（ポストモダニティ）は、アンビバランスが常態化することで道徳性が選択でき、必ずしも「善である」ことを意味しないという側面を指摘している。このバウマンの見解は、再帰的近代社会と道徳規範の関係が大きな転換期を迎えていること教えてくれる。また、先に分析した対人関係の全体的傾向からもわかるように、エゴイズム的な個人主義的傾向が認められる一方で、人とのつながりを求める傾向が明らかとなった。つまり、対人関係におけるアンビバランスな傾向が高校生の意識にあらわれている。

次に、このような学校社会において高校生の規範意識の特徴と高校生がさまざまな逸脱行動を考える際の基準について注目したい。青少年（中学生・高校生）がおこなうことを前提にして、「あなたはその行為が許せますか」という質問を用意した。具体的な逸脱行動については、「先生からの指導無視」「校則違反（遅刻を含む）」「飲酒・喫煙」「同棲（結婚していない男女と一緒に生活する）」「家出をする」「シンナーを吸う」「成人映画（DVD）」「口紅・マネキュアなどの化粧や髪を染める」「街中で落書きをする」「車やバイクで暴走行為をする」「親に無断で外泊する」「未成年が性行為をする」「万引きをする」「たかり行為（他人にお金をせびる）」「売春（お金をもらって性的行為をする）」「薬物（覚せい剤や大麻など）を使用する」の各項目から「絶対に許せない」「本人がするのは自由だ」のどちらかを選んでもらった。この設問の結果から、高校生の規範意識について考察したい。

### (1) 性別における規範意識の特徴

はじめに、性別における特徴から見てみたい。図8は「絶対に許せない」と答えた回答を男女別に示したものである。図8からわかるように、男女ともに「万引き」や「薬物使用」など、触法行為に該当する逸脱行動については、「絶対に許せない」という規範意識が高い。しかし、「無断外泊」や「先生からの指導無視」などについては、極端に低い比率を示している。

この大きな差の要因には、親の保護が必要な未成年（生徒）という年齢的な区分が逸脱行動の基準として大きく影響しているように思われる。つまり、触法行為は成人でも罰せられるが、低い比率を示した「無断外泊」や「校則違反」等の行動は、未成年や生徒という社会的地位の有無から生じる逸脱行動といえる。

また、同様の傾向は性別の違いにもあらわれている。全般的に触法行為にかかわる逸脱行動に対して、男子よりも女子の方がその比率は高い。しかし、「無断外泊」や

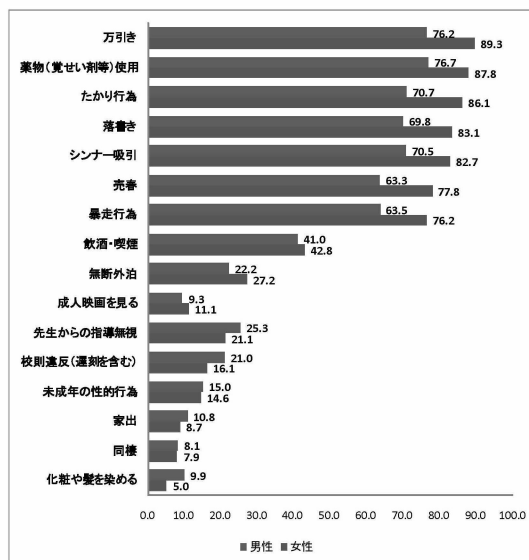


図8 各逸脱行動に対する規範意識 (性別)

「成人映画」等の例外はあるが、「先生からの指導無視」以下の質問項目(図8)では、男子が女子よりも高い比率を示している。つまり女子は、男子に比べて触法行為にかかわる逸脱行動に対して「許せない」という規範意識が高い反面、未成年(生徒)レベルの逸脱行動に対しては男子よりも低い傾向にある。

次に、「絶対にやってはいけないと思ったことをしてしまったとき、一番はじめに怒られる、または指導される人は誰か」という設問から逸脱行動を抑止する基準について見てみたい。図9は、この結果を男女別に示したものである。

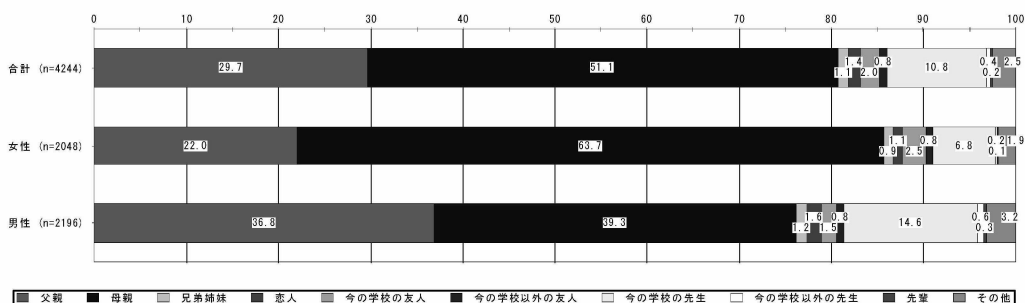


図9 逸脱行動の抑止基準

この結果を見ると、男子は「父親」(36.7%)と「母親」(39.3%)が均衡している。しかし、女子は男子に比べて「父親」(22.1%)よりも「母親」(63.8%)の比率が高い結果

となった。つまり、女子の逸脱行動の抑止的な基準には、「母親の存在」が大きいことがわかる。

続いて校則違反に注目して、規範意識と実際の逸脱行動の差について見てみたい。表 2 は「校則違反（遅刻含む）」に対する規範意識（絶対にゆるせない=1、本人がするのは自由だ=2）、「授業中に私語や携帯電話などをしている」（していない=1、している=2）、「これまでに無断欠席や無断の遅刻などの校則違反をしたことがあるか」（していない=1、している=2、わからない=0）の平均値をあらわしている。

この結果から、校則違反に対する意識は男子よりも女子が「自由である」という意識は高いが、実際の授業中における違反行為や校則違反の経験は男子の方が高いことがわかる。また、男女ともに無断欠席や遅刻などの校則違反

表 2 逸脱行動における平均値（性別）

	性別	件数	平均値	F 値
校則違反(遅刻を含む)	女性	2045	1.84	68.793 **
	男性	2204	1.79	
授業中の違反行為(私語・携帯)	女性	2046	1.30	15.860 **
	男性	2209	1.33	
校則違反経験	女性	2050	1.14	84.609 **
	男性	2209	1.21	

有意水準\*\*0.01%

経験よりも、授業中の私語や携帯電話などの授業中の違反行為が高い比率を占めている。

遅刻や無断欠席等の違反行為は、個人を特定してチェックされ、場合によっては進級や卒業にもかかわってくる。一方、授業中の私語や携帯電話については、遅刻や無断欠席に比べて見つからない場合もあり、携帯電話の没収を含めて教員に指導される場合でも、その場もしくは職員室等において口頭による指導で済むことも多く、特に、私語に関しては個人よりも複数に対する指導が中心となる。つまり、遅刻や無断欠席に比べて授業中の私語や携帯電話の違反行為は個人的なリスクが低いことが、表 2 の結果としてあらわれたのではないだろうか。

## （2）学校タイプ別における規範意識の特徴

性別に続いて、学校のタイプ別に規範意識の特徴を見てみたい。学校タイプの分類であるが、尾嶋（2001）の分類に修正を加え、41 校を複数の基準を用いて操作的に表 3 のように 3 つに分類した。

表 3 学校タイプ

大学等の高等教育機関への進学者も増加していることから、「普通科」の特徴の分類は高等教育進学率を 95%以上を設定し、さ

学校タイプ	特徴
①普通科	高等教育進学率95%以上で、国公立大学合格者数が校内進学者数の2割を超える進学校
②普通・職業科	①・②に該当しない高校
③職業科	就職率が50%以上で、専門学科の高校

らに国公立大学の現役合格者の基準を校内進学者数の 2 割に設定した。また「職業科」の分類では、校内の就職率が 5 割を基準とした。そして、この 2 つに該当しない普通科および職業科の高校を「普通・職業科」に分類した。この分類を用いて、図 8 と同様の質問項目から「絶対に許せない」のみを学校タイプごとに示したものが図 10 である。

図 10 からわかるように、「万引き」「たかり行為」「落書き」「暴走行為」「飲酒・喫煙」に関しては、「普通科」の生徒の規範意識は高い。しかし、「薬物（覚せい剤等）使用」以

下の 11 の項目では「普通科」と「職業科」を比べるとその比率は逆転している。特に、薬物（覚せい剤等）やシンナー、そして売春などの触法行為に対して、「絶対に許せない」という比率は、学校タイプのすべてにおいて7割以上を占めている。しかし、この触法行為を境にして「普通科」の生徒と「職業科」の生徒の規範意識の比率が逆転している点は注目される。

本調査の質問項目では明らかにならないが、これらの行為に対する本人の経験の有無やこれらの行為を経験した友人の有無がこの「普通科」と「職業科」の比率の逆転にかかわっているかもしれない。では、実際の学校生活における違反行為はどのような違いがあるのかを、表4を用いて見てみたい。

表4は「普通科」と「職業科」の差に注目して、表2と同様に「校則違反（遅刻含む）」に対する規範意識（絶対にゆるせない=1、本人がするのは自由だ=2）、「授業中の違反行為（私語・携帯電話）」をしている（していない=1、している=2）、「これまでに無断欠席や無断の遅刻などの校則違反をしたことがあるか」（していない=1、している=2、わからない=0）の平均値をあらわしている。

校則違反に対する意識の平均値は、大差ではないが「職業科」の生徒の方が「普通科」の生徒よりも低い。しかし、実際の授業中の違反行為や校則違反の経験は、「普通科」の生徒が低いことがわかる。この分析結果から、普通

科の生徒の学校社会におけるリスク管理の傾向が読み取れる。つまり、意識のレベルでは校則違反に対して寛容的な傾向であっても、実際の教員による評価レベルの違反行為に対しては、内申書や進学に影響することからおこなわないのではないだろうか。

図11は「校則は生徒をりっぱな人間に育てるためにある」という設問に対する回答結果である。この結果からもわかるように、「職業科」の生徒よりも「普通科」の生徒の方が「そう思う」および「どちらかといえばそう思う」と答えた比率は低い。つまり「普通科」の生徒は意識のレベルにおいて、校則に対して理想よりも現実的で冷めた意識を有していることがわかる。

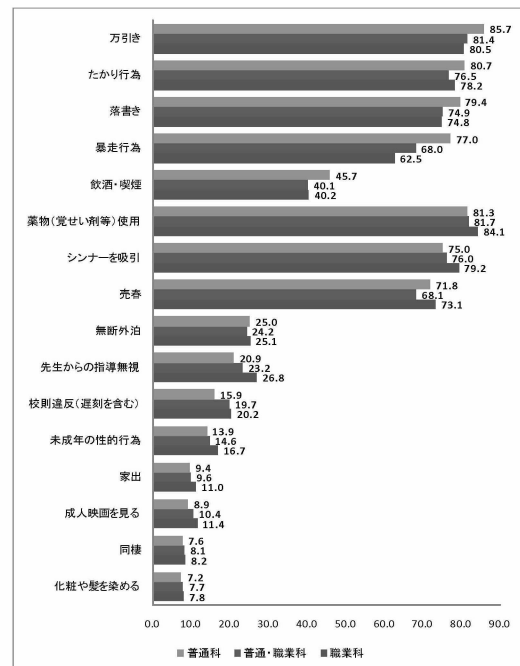


図10 各逸脱行動に対する規範意識 (学校タイプ別)

表4 逸脱行動における平均値 (学校タイプ別)

逸脱行動	学校タイプ	件数	平均値	F値
校則違反(遅刻を含む)	普通科	1796	1.83	19.295 **
	職業科	875	1.80	
授業中の違反行為(私語・携帯)	普通科	1796	1.24	204.010 **
	職業科	875	1.39	
校則違反経験	普通科	1798	1.15	85.787 **
	職業科	875	1.21	

有意水準\*\*0.01%

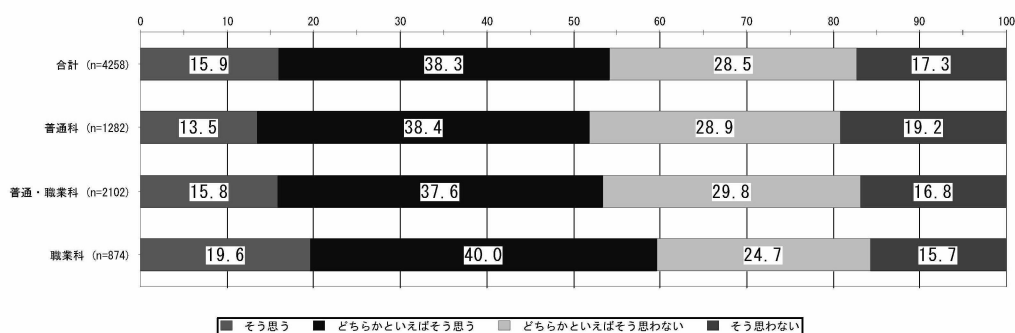


図 11 理想的校則意識

そこで、実際の教員との関係を知るために、「あなたにとって、現在接している先生とはどのような関係ですか」の設問を用意し、その回答を図 12 に示した。

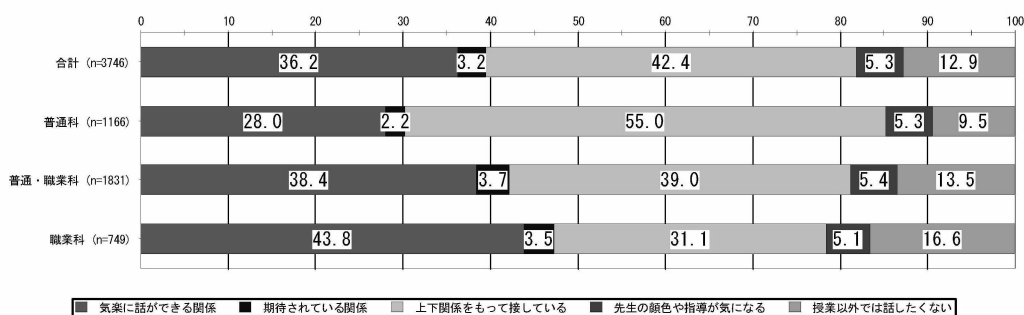


図 12 教員との関係

「普通科」の生徒は「上下関係をもって接している」(55.0%)が最も高い比率を占めている。それに対して、「職業科」の生徒は「気楽に話ができる関係」(43.8%)が最も高い比率を占めている。上下関係を前提とした教員との関係は、敬語等を用いながら教員と生徒の社会的な距離感をはかる関係ともいえる。一方で、気楽に会話ができる関係とは、教員との社会的な距離感を詰めて接することもあるため、生徒の立場から教員の個性を含めてマイナスの評価を受ける可能性が高い関係といえる。つまり、「普通科」の生徒は、どの教員に対してもマイナスの評価を与えない汎用性の高い上下関係を用いることで、教員による評価のリスクを管理していると思われる。

### (3) 各規範項目の背景にある意識

先にあげた具体的な逸脱行動の設問の回答を主成分分析し、3つの軸を抽出して表 5 に示した(本人がするのは自由だ=1、絶対にゆるせない=2)。第 1 軸は「薬物使用」「万引き」「シンナー吸引」「たかり行為」「街中で落書き」「売春」「暴走行為」の因子負荷量が大きい。これらは成人がおこなっても処罰される行為であり、法律にも触れる行為であると考えられるため、「触法規範(成人規範)」と呼ぶことにする。第 2 軸は「同棲」「成人



映画「家出」「未成年の性的行為」「化粧や染髪」

「無断外泊」に高い因子負荷量を持つ。これは、未成年であることが逸脱行為の基準と考えられることから「非行規範（未成年規範）」と名づけた。第3軸は「先生からの指導無視」「校則違反」「飲酒・喫煙」の因子負荷量が多い。これらは学校社会の生徒に対する教師の指導にかかわる意識を捉えたものといえるため「学校規範（生徒指導規範）」と呼ぶことにする。

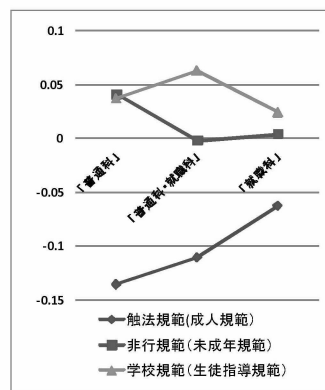
表5 逸脱行動を構成する要素

変数	第1軸	第2軸	第3軸
薬物使用	.835		
万引き	.830		
シンナー吸引	.778		
たかり行為	.720		
街中で落書き	.715		
売春	.715		
暴走行為	.636		
同棲		.730	
成人映画		.696	
家出		.680	
未成年の性的行為		.670	
化粧や染髪		.638	
無断外泊		.446	
先生からの指導無視			.824
校則違反(遅刻を含む)			.802
飲酒・喫煙			.514
固有値	4.22	2.775	1.938
寄与率	26.374	17.346	12.115
累積寄与率	26.374	43.72	55.835

注)値は主成分負荷量。絶対値0.4以上のもののみを示した。バリマックス回転。

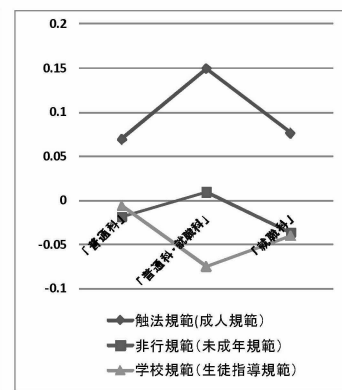
図13と図14は、各因子の得点と性別および学校タイプ別の関連を示したものである。

この結果、触法規範は男女ともに非行規範および学校規範とは異なる特徴がある。関連は弱い。男子は、学校タイプ別に関わらず正の関連があり、女子は負の関連がある。また女子の場合、触法規範は「普通科」が負の関連が最も強いが、男子は「普通科・職業科」が正の関連が最も強いことがわかる。この結果から、各規範は男女によって異なった関連があり、学校タイプ別においても異なる傾向が認められる。



注)触法規範p=.000、非行規範p=.058、学校規範p=.000

図13 女子の関連



注)触法規範p=.000、非行規範p=.058、学校規範p=.000

図14 男子の関連

#### (4) 規範意識に対する属性の影響

最後に、男女別のサンプルを用いて、「授業中の私語や携帯電話の有無」および「遅刻や無断欠席の有無」についてロジスティック回帰分析をおこなった。

男女ともに独立変数として、祖父母の同居ダミー（核家族=0、直系家族・大家族=1）、部活ダミー（所属していない=0、所属している=1）、ひとりっ子ダミー（兄弟姉妹有り=0、ひとりっ子=1）、ひとり親ダミー（両親あり=0、父子・母子家庭=1）、将来未定ダミー（将来決定=0、将来未定=1）、職業科ダミー（普通科・普通科職業科=0、職業科=1）の6つを強制投入法により投入した。その結果、女子の分析結果を表6、男子の分析結果を、表7に示した。

結果として、女子については部活ダミーが授業中の私語や携帯電話の使用の有無に有意な負の影響を与えている。Exp(B)は.510であることから、部活をやっているものはやっていないものに比べて授業中に私語や携帯電話を使用した経験があると答えるリスクが半分

くらいに減ることがわかる。つまり、部活に所属していることは、授業中の私語や携帯電話をしないことにプラスに影響を与えている。この傾向は遅刻や無断欠席の有無についても同様にプラスの影響を与えている。

その反面、進路が決まっていない生徒は、決まっている生徒に比べて授業中の私語や携帯電話の使用の経験に有意な正の影響を与えている。Exp(B)が1.644であることから、進路が未定であることは授業中の校則

違反経験があると答えるリスクが1.6倍に高まっていることがわかる。この傾向は、遅刻や無断欠席の経験にも認められた。同様にこの傾向は、ひとり親ダミーおよび職業科ダミーにも認められた。

男子については、遅刻や無断欠席の有無において、Exp(B)は.550であることから、部活をやっているものはやっていないものにくらべて遅刻や無断欠席をした経験があると答えるリスクが半分くらいに減っている。つまり、女子と同様に男子も部活に所属していることが、遅刻や無断欠席の抑止に対してプラスの影響を与えていることがわかる。また、ひとり親ダミーおよび職業科ダミーについては、授業中の私語や携帯電話の使用や遅刻および無断欠席の抑止にマイナスの影響を与えている。

男女ともに授業中の違反行為または遅刻や無断欠席等の経験に対して、部活ダミーは有意な負の影響を与えており、ひとり親ダミーおよび職業科ダミーは有意な正の影響を与えていた。しかし、女子については、将来決定の有無が男子に加えて有意に負の影響を与えていることが属性別に見た男女の特徴といえる。

#### 4. 総合的考察

本調査は、高校生の意識調査から学校社会における高校生の対人関係の特徴と社会規範に対する意識について明らかにすることが目的であった。その結果、高校生の対人意識を中心とした質問項目の回答から「個人主義的傾向」「つながり重視傾向」「利己主義的傾向」「能力主義的傾向」の4つの特徴が抽出された。

近代社会の一つの特徴として、集団（共同体）から個人へ変化、言い換えるならば集団よりも個人を尊重する傾向があげられる。M.ウェーバー（1920）は、プロテスタンティズムを対象に自己省察と内面重視に着目し、そのなかで個人の「自律性」を見出した。一方、この「自律性」と同時に生じる個人の「孤立化」傾向を、É.デュルケム（1897）は「常軌

表6 女子のロジスティック回帰分析結果

	授業中の私語や携帯電話の有無			遅刻や無断欠席の有無		
	B	標準誤差	Exp(B)	B	標準誤差	Exp(B)
祖父母同居ダミー	.052	.099	1.053	-.067	.106	.935
部活ダミー	-.105	.107	.901	-.598	.112	.550 ***
ひとりっ子ダミー	.062	.117	1.064	.132	.125	1.141
ひとり親ダミー	.475	.122	1.608 ***	.350	.130	1.418 **
将来未定ダミー	.295	.160	1.343	.251	.175	1.285
職業科ダミー	.333	.113	1.395 **	.406	.121	1.500 ***
定数	-.858	.106	.424 ***	-.547	.109	.579 ***
-2 対数尤度	2809.153			2315.105		
Cox-Snell R <sup>2</sup>	.016			.029		
Nagelkerke R <sup>2</sup>	.022			.041		
N	2088			1919		

\* p<.05; \*\* p<.01; \*\*\* p<.001

表7 男子のロジスティック回帰分析結果

	授業中の私語や携帯電話の有無			遅刻や無断欠席の有無		
	B	標準誤差	Exp(B)	B	標準誤差	Exp(B)
祖父母同居ダミー	.034	.104	1.035	-.139	.123	.870
部活ダミー	-.674	.106	.510 ***	-.881	.119	.414 ***
ひとりっ子ダミー	.015	.119	1.015	.058	.137	1.060
ひとり親ダミー	.461	.127	1.588 ***	.800	.141	2.226 ***
将来未定ダミー	.497	.172	1.644 **	.613	.190	1.845 **
職業科ダミー	.307	.119	1.359 **	.236	.137	1.266
定数	-.582	.106	.559 ***	-.908	.118	.403 ***
-2 対数尤度	2333.878			1869.098		
Cox-Snell R <sup>2</sup>	.037			.056		
Nagelkerke R <sup>2</sup>	.052			.087		
N	2018			1883		

\* p<.05; \*\* p<.01; \*\*\* p<.001

を逸した個人化」として「自己本位的自殺」をあげて説明している。

本来の個人主義は、個人の自律性を尊重し、他者の人格や権利を同等に尊重する点で利己主義とは異なる概念である。しかし、本調査における「個人主義的傾向」では、「困っている人に対する自己犠牲」や「他人に対する寛容的傾向」がマイナスの値を示しており、「約束を破っても気にならない」や「安心して話せる友人がない」などがプラスの値を示している。つまり、ここに抽出された「個人主義的傾向」は、「利己主義的傾向」および「能力主義的傾向」を含めて考えると、かなりミーイズム的な側面を含意する利己主義的個人主義の傾向といえる。

しかし、一方では「自分が浮くことは不安」や「人から認められないと不安」、そして、「一人でいると寂しい」などが高い比率を占めている「つながり重視傾向」も抽出された。「親しい人以外に関心がない」や「他人に同情するとバカをみる」などがマイナスの値を示していることから、「不安」に裏打ちされた対人関係の再帰的な傾向が、利己主義的個人主義の傾向とは対象的な「つながり重視傾向」としてあらわれたのではないだろうか。

また、このようなアンビバランスな対人意識のなかで、高校生の規範意識にもいくつかの特徴が認められた。全体的に性別の違いとして、「万引き」や「薬物（覚せい剤等）使用」等の触法行為については、男子よりも女子が「絶対に許せない」という回答が高い結果となった。しかし、「先生からの指導無視」等の未成年（生徒）レベルの逸脱行動になると、「絶対に許せない」という回答は男女の比率が逆転する。

犯罪白書（平成 22 年度版）における少年院の入院者数（平成 21 年）を見ても、男子 3,554 名、女子 418 名であり、女子よりも男子の方が実際に犯罪行為や触法行為をおこなっている。本調査の結果においても、男子よりも女子の方が、「授業中の違反行為」や「校則違反経験」の比率は低かった。つまり、女子に関しては、「先生からの指導無視」等の学校社会内の違反に対する意識は男子よりも低い、実際の校則違反等の違反行為は男子に比べておこなっていないことがわかった。同様の結果は、学校タイプ別の分析結果にもあらわれた。「普通科」の生徒は「絶対に許せない」という規範意識レベルにおいて、「薬物（覚せい剤等）使用」や「先生からの指導無視」等の項目について「職業科」の生徒よりも低い。しかし、実際に校則違反や授業中の違反行為を見ると、「普通科」の生徒は「職業科」の生徒に比べて違反行為は低い値を示している。この一つの要因として「普通科」の生徒は、実際の違反行為に対する教員や親からのサンクションをリスクとして意識しているからではないだろうか。

ロジスティック回帰分析においては、男女ともに部活という集団の所属が、実際の校則違反や授業中の違反行為の抑止にプラスに影響を与えており、特に、女子は進路を決定していることがプラスの影響を与えていた。集団への所属や進路の決定などが学校内の違反行動に影響していることは、今後の学校社会の生徒に対する指導において注目される結果といえる。

## 5. おわりに

今日の高校生は、携帯電話やインターネット等の高度情報化の渦中で対人関係にいくつかの特徴が認められる。本田（2011）は、学校社会の「共同性」（他者と関係）と「目的性」（「学力」の獲得）に着目して、その両者の不自然な併存状態を学校の「空気」として分析している。また、土井（2008）は、「優しい関係」として、親密な人間関係の成立する範囲が狭く、他の人間関係への乗り換えが困難であり、常にお互いの言動に敏感で緊張を強いられる関係を若者の特徴として指摘している。

若者の対人関係には、緊張感を伴うような「空気」が重視されており、この「空気」の背景には本調査で明らかになった「不安」が存在しているかもしれない。現代社会における「リスク社会」や「監視社会」といった特徴も「不安」という要因が大きく影響している。この「不安」は、社会的連帯が希薄化していくなかでますます増幅されている。

今後、流動性が高まる社会のもとで、高校生の対人関係や社会規範への意識は、ナルシシティックな個人化の影響を受けながら、一方では、不安に起因する対人関係の紐帯を「空気」を媒介して模索する傾向がさらに高まるかもしれない。そして、このような生徒のアンビバランすな対人関係のなか、社会規範を含めた教師の生徒に対する指導のあり方は大きな転換期を迎えている。つまり、従来の制度に支えられた生徒への指導とは異なり、生徒の潜在化する「不安」や生徒間および教員と生徒の間にある微妙な「空気」を理解して指導していく力が、今後の生徒への指導力として教員に強く求められる時代に入ったといえる。

## 引用・参考文献

- Bauman, Zygmunt., 2000, "Liquid Modernity" Polity Press. (=森田典正訳, 2001, 『リキッド・モダニティー—液状化する社会』大月書店)
- Beck, Ulrich., 1986, "Risikogesellschaft Auf dem Weg in eine andere Moderne" Suhrkamp Verlag. (=東廉・伊藤美登里訳, 1998, 『危険社会—新しい近代への道』法政大学出版会)
- Beck, Ulrich, Giddens, Anthony. Lash, Scott. 1994, "Reflexive Modernization-Politics, Tradition and Aesthetics in the Modern Social Order." Polity Press. (=松尾精文・小幡正敏・叶堂隆三訳, 1997, 『再帰的近代化—近現代における政治、伝統、美的原理』而立書房)
- 土井隆義, 2008, 『友だち地獄—「空気を読む」世代のサバイバル』ちくま新書.
- Durkheim, Émile, 1897, "Le suicide" F. Alcan, Paris. (宮島喬訳, 1985, 『自殺論』中央文庫)
- 土場学, 2006, 「現代高校生の規範意識の諸相」片瀬一男・木村邦博・阿部晃士編, 『教育と社会に対する高校生の意識—第5次調査報告書』東北大学教育文化研究会.
- 法務省法務総合研究所編, 2010, 『平成22年度版犯罪白書』.
- 本田由紀, 2011, 『若者の気分—学校の「空気」』岩波書店.
- 尾嶋史章編著, 2001, 『現代高校生の計量社会学—進路・生活・世代』ミネルヴァ書房.
- 友枝敏雄・鈴木讓編著, 2003, 『現代高校生の規範意識—規範の崩壊か、それとも変容か』九州大学出版会.

所属：山梨学院短期大学

E-mail アドレス：s-sakuta@ygu.ac.jp